

東京圏の鉄道における利用者にとって望ましい運賃システムに関する研究

北野 喜正 研究員

1. 研究の背景および目的

東京圏の鉄道は、充実した路線網や相互直通運転により、大変利便性の高いものとなっている。その一方で、近年は少子高齢化やそれに伴う生産年齢人口の減少、横ばい傾向の輸送人員、訪日外国人の増加や東京の国際競争力の強化の必要性など東京圏の鉄道を取り巻く環境は大きく変化してきている。

このような変化に対応するため、東京圏の鉄道では今まで以上に使いやすい運賃システムを実現することが望まれるであろう。本研究では、利用者から見た鉄道運賃における問題点を抽出し、利用者にとって使いやすい運賃システム、具体的にはシームレスな運賃システムを検討し、提案することを目的とする。

今回の報告では、運賃における問題点の抽出と実態の確認、国内外の事例調査、既存研究の整理、そして新しい運賃システム案を検討する概略について述べる。

2. 鉄道運賃システムの現状と問題点の整理

本研究では、文献調査やインタビュー調査を通じて、利用者から見た鉄道運賃に関する問題、社会的にみた鉄道運賃に関する問題を抽出した。昔からある問題、近年の社会の変化によって生じた問題などさまざまあるものの、本研究では特に割高な乗継運賃に焦点を当てることとする。

割高な乗継運賃の問題を検討するに当たり、はじめにその原因となっている初乗り運賃の意味を文献から調べた。

次に、割高な乗継運賃について平成22年度の大都市交通センサスのデータを使用して、利用者の行動実態を確認した。いくつかのルートを取り上げて分析を行った。発着駅を同一にして、会社間の乗継を含むルートと会社間の乗継を含まないルートにおける利用者数を比較した。乗継により運賃は前者が高くなるが、所要時間は短くなるルートを取り上げている。経路選択の理由は運賃以外にもさまざまあるだろうが、特に定期券以外の利用において、時間がかかっても会社間の乗継を含

まない割安なルートが多く利用によって選択されていることを確認した。

3. 事例調査

割高な乗継運賃の解消に向けた国内外の取組みを調査した。

国内の事例として、JRと大手民鉄間の乗継割引運賃制度や札幌市における乗継割引制度を取上げる。

海外の事例として、シンガポールとドイツのハンブルグの事例を取上げる。シンガポールでは、対距離区間制が採用され、また路線によって異なる運賃表が使われている。しかし、運賃は移動する総距離で計算され、それに路線ごとの重みを付ける仕組みを採用しているため、初乗り運賃の併算は解消されている。またハンブルグでは、割高な乗継運賃解消のためにゾーン制の共通運賃制度を採用しており、これを取上げる。

4. 既存の研究から

割高な乗継運賃の解消やその周辺に関する研究は、国内外問わず多数存在する。海外における研究では、新しい運賃システムの導入実例を取上げ、導入の効果を述べるとともに、その要因を統計的に分析しているものが多い。しかし、これらの研究では利用者数や運賃収入の伸びについて述べているものの、独立採算や民間運営による効率化インセンティブといった点については触れられておらず、日本の運賃システムを議論するうえで不十分である。本研究では、その点を考慮したうえで研究を進める。

5. 新しい運賃システム案の検討

以上を踏まえ、割高な乗継運賃の解消を目的として新しい運賃システム案を検討する。独立採算と各事業者による効率化インセンティブの確保を前提条件とする。本報告ではその検討の方向性を示す。引き続き今後は、新しい運賃システム案の深度化、試算、効果の検証と課題の抽出を行う予定である。